薩摩藩英国留学生出発

薩摩藩英国留学生派遣される

元治元(1864)年、五代友厚は、上海貿易の利益による留学生派遣と蒸気機関や紡績機械、鉱山機械の購入を藩に建言。同様の建言は、開成所教授・石河確太郎からもなされる。15名の留学生は開成所での成績優秀者、家柄、また攘夷思想を持つものからも選抜されている。これに引率者として新納久脩、すでにヨーロッパ渡航の経験のあった寺島宗則、留学生派遣を建言した五代友厚、長崎通詞・堀孝之の4人を加え19名がイギリスへと渡ることになるのである。

英国留学生の藩内行程

留学生たちに藩命が下ったのは、慶応元(1865)年正月18日。表向きの理由は、甑島と奄美大島への出張ということであった。五代友厚など3名は、長崎から香港へと向かう船の知らせと共に、串木野の羽島で合流の手はずとなっていた。

留学生たちの鹿児島出発は20日で、薩摩藩の主要街道でもある出水筋を早朝6時に出発した。この日は天気もよく、まず現在の鹿児島市石谷町にあった楠公社に向かった。御祭神は楠木正成で、まさに尊王思想の象徴ともいえる神社であるが、現存していない。ちなみに石谷は留学生の町田久成ら兄弟の領地でもある。その後伊集院においては島津義弘公を祀る妙円寺に参詣し、薩摩焼の窯元でもある苗代川こと現在の美山で宿泊する。

翌日21日は朝8時頃に苗代川を出発し、昼頃に市来湊に到着し、ここから船で羽島に向かっている。その後羽島には3月22日まで滞在。準備をしながら出発の日を待った。

後列左から／畠山義成、高見弥一、村橋久成
東郷愛之進、名越時成
前列左から／森有礼、市来和彦(村松淳蔵)、中村博愛

後列左から／田中盛明、町田実積、鮫島尚信
松木弘安(寺島宗則)、吉田清成
前列左から／町田実行、町田久成、磯永彦輔(長沢鼎)

維新後、使節団の松木弘安は初代外務卿になるなど外交面で、五代友厚は経済界で活躍(特集ページ参照)。留学生の森有礼は初代文部大臣、町田久成は帝国博物館創設に尽力、村橋久成は開拓使ビール(現・サッポロビール)の創設、磯永彦輔はアメリカに渡りカルフォルニアワインの興隆に貢献した。

後期集成館事業着手

集成館事業、再び。

島津斉彬の死によって縮小もしくは廃止されていた集成館事業は、文久3(1863)年の薩英戦争をきっかけに見直されることになった。翌年・元治元(1864)年6月に開設された洋学校の開成所は、西欧の技術や文化を学ぶ積極性を示す出来事といえる。

さらにこの年10月には斉彬時代に集成館事業の中心拠点だった磯に、新たな機械工場の建設が始まる。建設責任者は、斉彬の下で反射炉建設にも携わった竹下清右衛門だった。慶応元(1865)年、「ストーンホーム」と呼ばれる洋風石造建築が誕生した。この機械工場は、日本人によって建てられた為、西欧建築には見られない構造上の誤解や混乱が随所にみられる。ただ、日本もしくは薩摩の在来技術は、こうした混乱を超越して活かされ、今に遺る独特の石造建築を竣工させるに至ったのである。

機械工場には長崎から工作機械や蒸気機関が運ばれ、周辺にも鋳物工場やアルコール製造場、鑽開機工場が次々と立ち並んだ。西洋に負けない国づくりを目指す島津斉彬の想いのよみがえりであり、後期集成館といわれる積極的な西洋の技術導入による近代化への加速の幕開けであり、その後の日本の近代化をも牽引していく薩摩の力の発露であった。

尚古集成館

買い物上手な五代友厚

慶応元年の薩摩藩英国留学生派遣から今年で150年。この一行に副団長として渡英した五代友厚がNHK朝の連続テレビ小説に登場する。ドラマで描かれる大阪の商業に貢献した五代の半生も壮大だが、それに至る前半生も波乱に満ちたものだ。

生まれは天保6(1835)年。薩摩藩の地理書「三国名勝図会」の編纂者のひとり・五代秀尭の次男として生まれる。青年時代に藩主島津斉彬の牽引する近代化事業・集成館事業に接し、安政4(1857)年には長崎海軍伝習所へ派遣されるなど外の世界に早くから目を開く。文久2(1862)年にはグラバーの仲立ちで藩の軍艦を買入れ、その後上海貿易に従事するなどしている。翌1863年の薩英戦争では前年自ら買い入れた青鷹丸を含む軍艦3隻の拿捕に際して、同じく船長であった松木弘安(寺島宗則)とともに捕虜となり、横浜で解放された後は潜伏を余儀なくされるが、藩論が保守から改革に変わったことから開成所の設置、留学生派遣を建言し、自ら視察員の一員として同行するのである。

薩摩藩が慶応元年に英国留学生派遣した意義。それは自力での近代化の模索から、積極的な外国技術の導入へのきっかけであり、国禁を犯しての船出は、薩摩藩の幕藩体制からの自立化の現れといえる。

薩摩藩ひいては日本の将来を担う15名の留学生らが、その見聞を広め知識を吸収しているとき、五代と家老の新納久修は留学生引率とは別の任務を帯びていた。それは、紡績機械などの購入と技師の招聘の交渉であった。五代はマンチェスターとバーミンガムを視察、大きな商談をまとめる。

ひとつは、オールダムにあるプラット&ブラザーズ社製の紡績機械。これは当時最新の紡績機械であり、慶応3(1867)年に鹿児島紡績所に据えられたあと昭和42年まで稼働した優れものであった。

もう一つは、最新鋭の武器、エンフィールド銃である。エンフィールド銃は、当初南北戦争を優位に進め